二筋の血

石川啄木

青空文庫

夢の様な幼少の時の追憶、喜びも悲みも罪のない事許り、それからそれと朧氣に續いて、今になつては、皆、仄かな哀感の霞を隔てゝ麗かな子供芝居でも見る様に懐かしいのであるが、其中で、十五六年後の今日でも猶、鮮やかに私の目に殘つてゐる事が二つある。

何方が先で、何方が後だつたのか、明瞭とは思出し難い。が私は六歳で村の小學校に上つて、二年生から三年生に進む大試驗に、私の半生に唯一度の落第をした。其落第の時に藤野さんがゐたのだから、一つは慥か二度目の二年生の八歳の年、夏休み中の出來事と憶えてゐる。も一つも、暑い盛りの事であつたから、矢張其頃の事であつたらう。

今では文部省令が嚴しくて、學齡前の子供を入學させる様な事は全く無いのであるが、私の幼かつた頃は、片田舍の事でもあり、左程面倒な手續も要らなかつた様である。でも數へ年で僅か六歳の、然も私の様に※弱い者の入學るのは、餘り例のない事であつた。それは詰り、平生私の遊び仲間であつた一歳二歳年長の子供等が、五人も七人も一度に學校に上つて了つて、淋しくて〳〵耐らぬ所から、毎日の様に好人物の父に強請つた爲なので、初めの間こそお前はまだ餘り小さいからと禁めてゐたが根が悪い事ぢや無し、父も内心には喜んだと見えて、到頭或日學校の高島先生に願つて呉れて、翌日からは私も、二枚折の紙石盤やら硯やら石筆やらを買つて貰つて、諸友と一緒に學校に行く事になつた。されば私の入學は、同じ級の者より一ヶ月も後の事であつた。父は珍らしい學問好で、用のない冬の晩などは、字が見えぬ程煤びきつ

て、表紙の襤褸になつた孝經やら十八史略の端本やらを持つて、茶話ながら高島先生に教はりに行く事などもあつたものだ。

其頃父は三十五六、田舎には稀な程晩婚であつた所爲でもあらうか、私には兄も姉も、妹もなく唯一粒種、剛い言葉一つも懸けるられずに育つた爲めか、背丈だけは普通であつたけれども、ひよろ〳〵と痩せ細つてゐて、隨分近所の子供等と一緒に、裸足で戸外の遊戯もやるにかゝはらず、怎したものか顔が蒼白く、駈競でも相撲でも私に敗ける者は一人も無かつた。隨つて、さうして遊んでゐながらも、時として密り一人で家に歸る事もあつたが、學校に上つてからも其性癖が變らず、樂書をしたり、木柵を潜り抜けたりして先生に叱られる事は人並であつたけれど、兎角卑屈で、寡言で黒板に書いた字を讀めなどと言はれると、直ぐ赤くなつて、俯いて、返事もせず石の如く堅くなつたものだ。自分から進んで學校に入れて貰つたに拘はらず、私は遂學科に興味を有てなかつた。加之時には晝休に家へ歸つた儘、人知れず裏の物置に隱れてゐて、午後の課業を休む事さへあつた。病身の母は、何時か私の頭を撫でながら、此兒も少し他の子供等と喧嘩でもして呉れる樣になれば可いと言つた事がある。私は何とも言はなかつたが、腹の中では、喧嘩すれば俺が敗けるもの、と考へてゐた。

私の家といふのは、村に唯一軒の桶屋であつたが、桶屋だけでは生計が立たぬので、近江屋といふ近郷一の大地主から、少し許り田を借りて小作をしてゐた。隨つて、年中變らぬ稗勝の飯に粘氣がなく、時偶夜話に來る人でもあれば、母が取あへず米を一掴み程十能で焦つて、茶

代りに出すといふ有様であつたから、私なども、年中つぎだらけの布の股引を穿いて、腰までしかない洗晒しの筒袖、同じ服装の子供等と共に裸足で歩く事は慣れたもので、頭髪の延びた時は父が手づから剃つて呉れるのであつた。名は檜澤新太郎といふのだが、村の人は誰でも「桶屋の新太」と呼んだ。

學校では、前にも言つた如く、些とも學科に身を入れなかつたから、一年から二年に昇る時は、三十人許りの級のうち尻から二番で漸と及第した。惡い事には、私の家の兩隣の子供、一人は一級上の男で、一人は同じ級の女の兒であつたが、何方も其時半紙何帖かを水引で結んだ御褒賞を貰つたので、私は流石に子供心にも情ない様な氣がして、其授與式の日は、學校から歸ると、例の様に戸外に出もせず、日が暮れるまで大きい圍爐裏の隅に蹲つて、浮かぬ顏をして火箸許り弄つてゐたので、父は夕飯が濟んでから、黒い羊羹を二本買つて來て呉れて、お前は一番稚いのだからと言つて慰めて呉れた。

それも翌日になれば、もう忘れて了つて、私は相變らず時々午後の課業を休み〳〵してゐたが、七歳の年が暮れての正月、第三學期の初めになつて、學校には少し珍らしい事が起つた。それは、佐藤藤野といふ、村では儁べる者の無い程美しい女の兒が、突然一年生に入つて來た事なので。

百何人の生徒は皆目を聳てた。實際藤野さんは、今想うても餘り類のない程美しい兒だつたので、前髪を眉の邊まで下げた顏が圓く、黒味勝の眼がパッチリと明るくて、色は飽迄白く、

笑ふ毎に笑窪が出來た。男生徒は言はずもの事、女生徒といつても、赤い布片か何かで無雜作に髪を束ねた頭を、垢染みた浅黄の手拭に包んで、雪でも降る日には、不恰好な雪沓を穿いて、半分に截つた赤毛布を頭からスッポリ被つて來る者の多い中に、大きく菊の花を染めた、派手な唐縮緬の衣服を着た藤野さんの姿の交つたのは、村端の泥田に蓮華の花の咲いたよりも猶鮮やかに、私共の眼に映つたのであつた。

藤野さんは、其以前、村から十里とも隔たらぬ盛岡の市の學校にゐたといふ事で、近江屋の分家の、呉服屋をしてゐる新家といふ家に、阿母さんといふ人と二人で來てゐた。

私共の耳にまで入つた村の噂では、藤野さんの阿母さんといふ人は、二三年も前から眼病を患つてゐた新家の御新造の妹なさうで、盛岡でも可也な金物屋だつたが、怎した破目かで破産して、夫といふ人が首を縊つて死んで了つた爲め、新家の家の家政を手傳ひ旁々、亡夫の忘れ形見の藤野さんを伴れて、世話になりに來たのだといふ事であつた。其阿母さんも亦、小柄な、色の白く美しい、姉なる新家の御新造にも似ず、いたつて快活な愛想の好い人であつた。

村の學校は、其頃まだ見窄らしい尋常科の單級で、外に補習科の生徒が六七人、先生も高島先生一人限りだつたので、教場も唯一つ。級は違つてゐても、鈴の様な好い聲で藤野さんが讀本を讀む時は、百何人が皆石筆や筆を休ませて、其方許り見たものだ。殊に私は、習字と算術の時間が厭で〳〵耐らぬ所から、よく呆然して藤野さんの方を見てゐたもので、其度先生は竹の鞭で私の頭を輕く叩いたものである。

藤野さんは、何學科でも成績が可かつた。何日であつたか、二年生の女生徒共が、何か授業中に惡戯をしたといつて、先生は藤野さんを例に引いて誡められた事もあつた様だ。上級の生徒は、少しそれに不服であつた。然し私は何も怪まなかつた。何故なれば、藤野さんは其頃、學校中で、村中で、否、當時の私にとつての全世界で、一番美しい、善い人であつたのだから。

其年の三月三十日は、例年の如く證書授與式、近江屋の旦那様を初め、村長様もお醫者様も、其他村の人達が五六人學校に來られた。私も、祕藏の袖の長い衣服を着せられ、半幅の白木綿を兵子帶にして、皆と一緒に行つたが、黒い洋服を着た高島先生は、常よりも一層立派に見えた。教場も立派に飾られてゐて、正面には日の丸の旗が交叉してあつた。其前の白い覆布をかけた卓には、松の枝と竹を立てた、大きい花瓶が載せてあつた様に憶えてゐる。勅語の捧讀やら「君が代」の合唱やらが濟んで、十何人かの卒業生が、交る交る呼出されて、皆嬉し相にして卒業證書を貰つて來る。其中の優等生は又、村長様の前に呼ばれて御褒賞を貰つた。軈て、三年二年一年といふ順で、新たに進級した者の名が讀上げられたが、怎したものか私の名は其中に無かつた。「新太ア落第だ、落第だ。」と言つて周圍の子供等は皆私の顔を見た。私は其時甚※氣持がしたつたか、今になつては思出せない。

式が濟んでから、近江屋様から下さるといふ紅白の餅だけは私も貰つた。皆は打伴れて勇まし相に家に歸つて行つたが、私共落第した者六七人だけは、用があるからと言つて先生に殘された。其中には村端の堀立小屋の娘もあつて、滂々泣いてゐたが、私は、若しや先生は私に

だけ證書を後で呉れるのではないかといふ様な、理由もない事を心待ちに待つてゐた様であつた。

　軈て一人々々教員室に呼ばれて、それ〳〵に誡められたり勵まされたりしたが、私は一番後しになつた。そして、「お前はまだ年もいかないし、體も弱いから、もう一年二年生で勉強して見ろ。」と言はれて、私は聞えぬ位に「ハイ」と答へて叩頭（おじぎ）をすると、先生は私の頭を撫でて、「お前は餘り穏（おとな）し過ぎる。」と言つた、そして卓子（テーブル）の上のお盆から、麥煎餅を三枚取つて下すつたが、私は其時程先生のお慈悲を有難いと思つた事はなかつた。其室には、村長様を初め二三の老人達がまだ殘つてゐた。

　私は紙に包んだ紅白の餅と麥煎餅を、兩手で胸に抱いて、悄々（しを〳〵）と其處を出て來たが、昇降口まで來ると、唯もう無暗に悲しくなつて、泣きたくなつて了つた。喉まで出懸けた聲は辛うじて噛殺したが、先生の有難さ、友達に冷笑（ひやか）される羞（はづ）かしさ、家へ歸つて何と言つたものだらうといふ様な事を、子供心に考へると、小さい胸は一圖に迫つて、涙が留度もなく溢れる。すると、怎（どう）して殘つてゐたものか、二三人の女生徒が小使室の方から出て來た様子がしたので、私は何とも言へぬ羞かしさに急に動悸（どうき）がして來て、ぴたりと柱に凭懸（よりかゝ）つた儘、顔を見せまいと俯（うつむ）いた。

　すた〳〵と輕い草履の音が後ろに近づいたと思ふと、『何したの、新太郎さん？』と言つた聲は、藤野さんであつた。それまで一度も言葉を交した事のない人から、恁（か）う言はれたので、私は思はず顔を上げると、藤野さんは、晴乎（ぱつちり）とした眼に柔かな光を湛へて、凝（ぢつ）と私を瞶（みつ）めてゐ

た。私は直ぐ又俯いて、下唇を噛締めたが、それでも歔欷が洩れる。

藤野さんは暫く默つてゐたが、『泣かないんだ、新太郎さん。私だつて今度は、一番下で漸と及第したもの。』と、弟にでも言ふ様に言つて、『明日好い物持つてつて上げるから、泣かないんだ。皆が笑ふから。』と、私の顔を覗き込む様にしたが、私は片頬を柱に擦りつけて、覗かれまいとしたので、又すたすたと行つて了つた。藤野さんは何學科も成績が可かつたのだけれど、三學期になつてから入つたので、一番尻で二年生に進級したのであつた。

其日の夕暮、父は店先でトン〳〵と桶の箍を嵌れてゐたし、母は水汲に出て行つた後で私は悄然と圍爐裏の隅に蹲つて、もう人顔も見えぬ程薄暗くなつた中に、焚火の中へ竹屑を投げ入れては、チロチロと舌を出す様に燃えて了ふのを餘念もなく眺めてゐたが、裏口から細い聲で、『新太郎さん、新太郎さん。』と呼ぶ人がある。私はハッと思ふと、突然土間へ飛び下りて、草履も穿かずに裏口へ駈けて行つた。

藤野さんは唯一人、戸の蔭に身を擦り寄せて立つてゐたが、私を見ると莞爾笑つて、『まあ、裸足で。』と、心持眉を顰めた。そして急がしく袂の中から、何か紙に包んだ物を出して私の手に渡した。

『これ上げるから、一生懸命勉強するッこ。私もするから。』と言ふなり、私は一言も言はずに茫然立つてゐたので、すた〳〵と夕暗の中を走つて行つたが、五六間行くと後ろを振返つて、手を顔の前で左右に動かした。誰にも言ふなといふ事だと氣が附いたので、私は頷いて見せる

と、其儘またすた〳〵と梨の樹の下を。

紙包の中には、洋紙の帳面が一册に半分程になつた古鉛筆、淡紅色メリンスの布片に捲いたのは、鉛で拵へた玩具の懐中時計であつた。

其夜私は、薄暗い手ランプの影で、鉛筆の心を甜めながら、贈物の帳面に、讀本を第一課から四五枚許り、丁寧に謄寫した。私が初めて文字を學ぶ喜びを知つたのは、實に其時であつた。

人の心といふものは奇妙なものである。二度目の二年生の授業が始まると、私は何といふ事もなく學校に行くのが愉くなつて、今迄では飽きて〳〵仕方のなかつた五十分宛の授業が、他愛もなく過ぎて了ふ様になつた。竹の鞭で頭を叩かれる事もなくなつた。

廣い教場の、南と北の壁に黒板が二枚宛、高島先生は急がしさうに其四枚の黒板を　つて歩いて教へるのであつたが、二年生は、北の壁の西寄りの黒板に向つて、粗末な机と腰掛を二列に並べてゐた。前方の机に一團になつてゐる女生徒には、無論藤野さんがゐた。　新學年が始まつて三日目かに、私は初めて先生に賞められた。默つて聞いてさへ居れば、先生の教へる事は屹度解る。記憶力の強い子供の頭は、一度理解したことは仲々忘れるものでない。知つた者は手を擧げろと言はれて、私の手を擧げぬ事は殆ど無かつた。

何の學科として嫌ひなものはなかつたが、殊に私は習字の時間が好であつた。先生は大抵私に水注の役を吩附けられる。私は、葉鐵で拵へた水差を持つて、机から机と　つて歩く。机の

兩端には一つ一つ硯が出てゐるのであつたが、大抵は虎斑か黒の石なのに、藤野さんだけは、何石なのか紫色であつた。そして私が水を注いでやつた時、些と叮頭をするのは藤野さん一人であつた。

氣の揉めるのは算術の時間であつた。私も藤野さんも其年八歳であつたのに、豊吉といふ兒が同じ級にあつて、それが私等よりも二歳か年長であつた。體も大きく、頭腦も發達してゐて、私が知つてゐる事は大抵藤野さんも知つてゐたが、又、二人が手を擧げる時は大抵豊吉も手を擧げた。何しろ子供の時の二歳違ひは、頭腦の活動の精不精に大した懸隔があるもので、それの最も顯著に現はれるのは算術である。豊吉は算術が得意であつた。

問題を出して置いて先生は別の黒板の方へ　つて行かれる。そして又歸つて來て、『出來た人は手を擧げて。』と、竹の鞭を高く擧げられる。それが、少し難かしい問題であると、藤野さんは手を擧げながら、若くは手を擧げずに、屹度後ろを向いて私の方を見る。私は、其眼に滿干する微かな波をも見遁す事はなかつた。二人共手を擧げた時、殊にも豊吉の出來なかつた時は、藤野さんの眼は喜びに輝いた。豊吉も藤野さんも出來なくて、私だけ手を擧げた時は、邪氣ない羨望の波が寄つた。若しかして、豊吉も藤野さんも手を擧げて、私だけ出來ない事があると、氣の毒相な眼眸をする。そして、二人共出來ずに、豊吉だけ誇りかに手を擧げた時は、美しい藤野さんの顔が瞬く間暗い翳に掩はれるのであつた。

藤野さんの本を讀む聲は、隣席の人すら聞えぬ程讀む他の女生徒と違つて、凛として爽やか

であつた。そして其讀方には、村の兒等にはない、一種の抑揚があつた。私は、一月二月と經つうちに、何日ともなく、自分でも心附かずに其抑揚を眞似る樣になつた。友達はそれと氣が附いて笑つた。笑はれて、私は改めようとするけれども、いざとなつて聲を立てゝ讀む時は、屹度其抑揚が出る。或時、小使室の前の井戸端で、六七人も集つて色々な事を言ひ合つてゐた時に、豐吉は不圖其事を言ひ出して、散々に笑つた末、『新太と藤野さんと夫婦になつたら可がんべえな。』と言つた。

藤野さんは五六歩離れた所に立つてゐたつたが、此時、『成るとも。成るとも。』と言つて皆を驚かした。私は顔を眞赤にして矢庭に駈出して了つた。

いくら子供でも、男と女は矢張男と女、學校で一緒に遊ぶ事などは殆ど無かつたが、夕方になると、家々の軒や破風に夕餉の煙の靉く街道に出て、よく私共は寶奪ひや鬼ごツこをやつた。時とすると、それが男組と女組と一緒になる事があつて、其※時は誰しも周圍が暗くなつて了ふまで夢中になつて遊ぶのであるが、藤野さんが鬼になると、屹度私を目懸けて追つて來る。私はそれが嬉しかつた。奈何に※弱い體質でも、私は流石に男の兒、藤野さんはキツと口を結んで敏く追つて來るけれど、容易に捉らない。終ひには息を切らして喘々するのであるが、私は態と捉まつてやつて可いのであるけれど、其處は子供心で、飽迄も〳〵身を飜して意地悪く遁げる。それなのに、藤野さんは鬼ごツこの度、矢張私許り目懸けるのであつた。

新家の家には、藤野さんと從兄弟同志の男の兒が三人あつた。上の二人は四年と三年、末兒

はまだ學校に上らなかつたが、何れも餘り成績が可くなく、同年輩の近江屋の兒等と極く仲が惡かつたが、私の膽氣に憶えてゐる所では、藤野さんもよく二人の上の兒に苛責られてゐた樣であつた。何時か何處かで叩かれてゐるのを見た事もある樣だが、それは明瞭しない。唯一度私が小さい桶を擔いで、新家の裏の井戸に水汲に行くと、恰度其處の裏門の柱に藤野さんが倚懸つてゐて、一人潸々と泣いてゐた。怎したのだと私は言葉をかけたが、返事はしないで長い袂の端を前齒で噛んでゐた。さうなると、私は性質としてもう何も言へなくなるので、自分まで妙に涙ぐまれる樣な氣がして來て、默つて大柄杓で水を汲んだが、桶を擔いで歩き出すと、

『新太郎さん。』と呼止められた。

『何す?』

『好い物見せるから。』

『何だす?』

『これ。』と言つて、袂の中から丁寧に、美しい花簪を出して見せた。

『綺麗だなす。』

『……。』

『買つたのすか?』

藤野さんは頭を振る。

『貰つたのすか?』

『阿母さんから。』と低く言つて、二度許り歔欷あげた。
『富太郎さん（新家の長男）に苛責められたのすか？』
『二人に。』
私は何とか言つて慰めたかつたが、何とも言ひ様がなくて、默つて顔を瞶めてゐると、『これ上げようかな？』と言つて、花簪を弄つたが、『お前は男だから。』と後に隱す振をするなり、涙に濡れた顔に美しく笑つて、バタバタと門の中へ駈けて行つて了つた。私は稚い心で、藤野さんが二人の從兄弟に苛責られて泣いたので、阿母さんが簪を呉れて賺したのであらうと想像して、何といふ事もなく富太郎のノッペリした面相が憎らしく、妙な心地で家に歸つた事があつた。
何日しか四箇月が過ぎて、七月の末は一學期末の試驗。一番は豐吉、二番は私、藤野さんが三番といふ成績を知らせられて、夏休みが來た。藤野さんは、豐吉に敗けたのが口惜いと言つて泣いたと、富太郎が言囃して歩いた事を憶えてゐる。

休暇となれば、友達は皆、本や石盤の置所も忘れて、毎日々々山蔭の用水池に水泳に行くのであつた。私も一寸々々一緒に行かぬではなかつたが、怎してか大抵一人先に歸つて來るので、父の仕事場にしてある店先の板間に、竹屑やら鉋屑の中に腹匍になつては、汗を流しながら讀本を復習たり、手習をしたりしたものだ。そして又、目的もなく軒下の日陰に立つて、時々藤

野さんの姿の見えるのを待つてゐたものだ。

すると大變な事が起つた。

八月一杯の休暇、其中旬頃とも下旬頃とも解らぬが、それは〳〵暑い日で、空には雲一片なく、腦天を焙りつける太陽が宛然火の様で、習との風も吹かぬから、木といふ木が皆死にかかつた様に其葉を垂れてゐた。家々の前の狹い溝には、流れるでもない汚水の上に、薄曇つた泡が數限りなく腐つた泥から湧いてゐて、日に晒された幅廣い道路の礫は足を燒く程暖く、蒸された土の温氣が目も眩む許り胸を催嘔せた。

村の後ろは廣い草原になつてゐて、草原が盡きれば何十町歩の青田、それは皆近江屋の所有地であつたが、其青田に灌漑する、三間許りの野川が、草原の中を貫いて流れてゐた。野川の岸には、近江屋が年中米を搗かせてゐる水車小屋が立つてゐた。

春は壺菫に秋は桔梗女郎花、其草原は四季の花に富んでゐるので、私共はよく遊びに行つたものだが、其頃は一面に萱草の花の盛り、殊にも水車小屋の四周には澤山咲いてゐた。小屋の中には、直徑二間もありさうな大きい水車が、朝から晩までギウ〳〵と鈍い音を立てて　つてゐて、十二本の大杵が斷間もなく米を搗いてゐた。

私は其日、晒布の袖無を着て帶も締めず、黒股引に草履を穿いて、額の汗を腕で拭き拭き、新家の門と筋向になつた或駄菓子屋の店先に立つてゐた。

と、一町程先の、水車小屋へ曲る路の角から、金次といふ近江屋の若者が、血相變へて駈け

て來た。

『何しただ?』と誰やら聲をかけると、

『藤野樣ア水車の心棒に捲かれて、杵に搗かれただ。』と大聲に喚いた。私は僞とも眞とも解らず、唯強い電氣にでも打たれた樣に、思はず聲を立てて『やあ』と叫んだ。

と、其若者の二十間許り後から、身體中眞白に米の粉を浴びた、髯面の骨格の逞ましい、六尺許りの米搗男が、何やら小脇に抱へ込んで、これも疾風の如くに駈けて來た。見るとそれは藤野さんではないか!

其男が新家の門まで來て、中に入らうとすると、先に知らせに來た若者と、肌脱ぎした儘の新家の旦那とが飛んで出て來て、『醫者へ、醫者へ。』と叫んだ。男は些と足淀して、直ぐまた私の立つてゐる前を醫者の方へ駈け出した。其何秒の間に、藤野さんの變つた態が、よく私の目に映つた。男は、宛然鷲が黄鳥でも攫へた樣に、小さい藤野さんを小脇に抱へ込んでゐたが、美しい顔がグタリと前に垂れて、後には膝から下、雪の樣に白い脚が二本、力もなくブラ〳〵してゐた。其左の脚の、膝頭から斜めに踵へかけて、生々しい紅の血が、三分程の幅に唯一筋!

其直ぐ後を、以前の若者と新家の旦那が駈け出した。旦那の又直ぐ後を、白地の浴衣を着た藤野さんの阿母さん、何かしら手に持つた儘、火の樣に熱した礫の道路を裸足で……

其キツと堅く結んだ口を、私は、鬼ごツこに私を追駈けた藤野さんに似たと思つた。無論そ

れは一秒時の何百分の一の短かい間。

これは、百度に近い炎天の、風さへ動かぬ眞晝時に起つた光景だ。

私は、鮮かな一筋の血を見ると、忽ち胸が嘔氣を催す様にムッとして、目が眩んだのだから、阿母さんの顔の見えたも不思議な位。夢中になつて其後から駈け出したが、醫者の門より二三軒手前の私の家へ飛び込むと、突然仕事をしてゐた父の膝に突伏した儘、氣を失つて了つたのださうな。

藤野さんは、恁うして死んだのである。

も一つの記憶も、其頃の事、何方が先であつたか忘れたが、矢張夏の日の嚇灼たる午後の出來事と憶えてゐる。

村から一里許りのK停車場に通ふ荷馬車が、日に二度も三度も、村端から眞直に北に開いた國道を塵塗れの黒馬の蹄に埃を立てて往返りしてゐた。其日私共が五六人、其空荷馬車に乘せて貰つて、村端れから三四町の、水車へ行く野川の土橋まで行つた。一行は皆腕白盛りの百姓子、中には腦天を照りつける日を怖れて大きい蕗の葉を帽子代りに頭に載せたのもあつた。

土橋を渡ると、兩側は若松の並木、其路傍の夏草の中に、汚い服裝をした一人の女乞食が俯臥に寢てゐて、傍には、生れて滿一年と經たぬ赤兒が、嗄れた聲を絞つて泣きながら、草の中を這※つてゐた。

それを見ると、馬車曳の定老爺が馬を止めて、『怎しただ?』と聲をかけた。私共は皆馬車から跳下りた。

女乞食は、大儀相に草の中から顔を擡げたが、垢やら埃やらが流るる汗に斑ちて、鼻のひしやげた醜い面に、謂ふべからざる疲勞と苦痛の色。左の眉の上に生々しい痍があつて一筋の血が頬から耳の下に傳つて、胸の中へ流れてゐる。

『馬に蹴られて、歩けねえだもん。』と、絶え入りさうに言つて、又俯臥した。

定老爺は、暫く凝と此女乞食を見てゐたが、『村まで行つたら可がべえ。醫者様もあるし巡査も居るだア。』と言捨てゝ、ガタ〳〵荷馬車を追つて行つて了つた。

私共は、ズラリと女の前に立披つて見てゐた。稍あつてから、豊吉が傍に立つてゐる萬太郎といふのの肩を叩いて、『汚ねえ乞食だでア喃。首玉ア眞黒だ。』

草の中の赤兒が、怪訝相な顔をして、四這になつた儘私共を見た。女はビクとも動かぬ。

それを見た豊吉は、遽に元氣の好い聲を出して、『死んだどウ、此乞食ア。』と言ひながら、一掴みの草を採つて女の上に投げた。『草かけて埋めてやるべえ。』

すると、皆も口々に言罵つて、豊吉のした通りに草を投げ始めた。私は一人遠くに離れてゐる様な心地でそれを見てゐた。

と、赤兒が稍大きい聲で泣き出した。女は草から顔を擡げた。

『やあ、生きだ〳〵。また生きだでア。』と喚きながら、皆は豊吉を先立てゝ村の方に遁げ出

した。私は怎したものか足が動かなかつた。

醜い乞食の女は、流れた血を拭かうともせず、どんよりとした疲勞の眼を怨し氣に※つて、唯一人殘つた私の顏を凝と瞶めた。私も瞶めた。其、埃と汗に塗れた顏を、傾きかけた夏の日が、強烈な光を投げて憚りもなく照らした。頰に流れて頸から胸に落ちた一筋の血が、いと生々しく目を射つた。

私は、目が眩いて四邊が暗くなる樣な氣がすると、忽ち、いふべからざる寒さが體中を戰かせた。皆から三十間も遲れて、私も村の方に駈け出した。

然し私は、怎したものか駈けて行く子供等に追つかうとしなかつた。そして、二十間も駈けると、立止まつて後を振返つた。乞食の女は、二尺の夏草に隱れて見えぬ。更に豐吉等の方を見ると、もう乞食の事は忘れたのか、聲高に「吾は官軍」を歌つて駈けてゐた。

私は其時、妙な心地を抱いてトボ〳〵と歩き出した。小さい胸の中では、心にちらつく血の顏の幻を追ひながら、「先生は不具者や乞食に惡口を利いては可ないと言つたのに、豐吉は那※事をしたのだから、たとひ豐吉が一番で私が二番でも、私より豐吉の方が惡い人だ。」といふ樣な事を考へてゐたのであつた。

あはれ、其後の十幾年、私は村の小學校を最優等で卒へると、高島先生の厚い情によつて、盛岡市の高等小學校に學んだ。其處も首尾よく卒業して、縣立の師範學校に入つたが、其夏父

は肺を病んで死んだ。間もなく、母は隣村の實家に歸つた。半年許りして、或事情の下に北海道に行つたとまで知つてゐるが、生きてゐるとも死んだとも、消息を受けた人もなければ、尋ねる的もない。

私は二十歳の年に高等師範に進んで、六箇月前にそれを卒へた。卒業試驗の少し前から出初めた惡性の咳が、日ましに募つて來て、此鎌倉の病院生活を始めてからも、既に四箇月餘りを過ぎた。

學窓の夕、病室の夜、言葉に文に友の情は沁み〳〵と身に覺えた。然し私は、何故か多くの友の如く戀といふものを親しく味つた事がない。或友は、君は餘り内氣で、常に警戒をしすぎるからだと評した。或は然うかも知れぬ。或友は、朝から晩まで黄卷堆裡に沒頭して、全然社会に接せぬから機會がなかつたのだと言つた。或は然うかも知れぬ。又或友は、知識の奴隷になつて了つて、氷の如く冷酷な心になつたからだと冷笑した。或は實に然うなのかも知れぬ。

幾人の人を癒やし、幾人の人を殺した此寢臺の上、親み慣れた藥の香を吸うて、濤音遠き枕に、夢むともなく夢むるのは十幾年の昔である。ああ、藤野さん！　僅か八歳の年の半年餘の短い夢、無論戀とは言はぬ。言つたら人も笑はうし、自分でも悲しい。唯、木陰地の濕氣にも似て、日の目も知らぬ淋しき半生に、不圖天上の枝から落ちた一點の紅は其人である。紅と言へば、あゝ、かの八月の炎天の下、眞白き脛に流れた一筋の血！　まざまざとそれを思出す毎に、何故といふ譯もなく私は又、かの夏草の中に倒れた女乞食を思出すのである。と、直ぐ又

私は、行方知れぬ母の上に怖しい想像を移す。咯血の後、昏睡の前、言ふべからざる疲勞の夜の夢を、幾度となく繰返しては、今私の思出に上る生の母の顔が、もう眞の面影ではなくて、かの夏草の中から怨めし氣に私を見た、何處から來て何處へ行つたとも知れぬ、女乞食の顔と同じに見える樣になつたのである。病める冷たき胸を抱いて人生の淋しさ、孤獨の悲しさに遣瀨もない夕べ、切に戀しきは、文字を學ぶ悅びを知らなかつた以前である。今迄に學び得た知識それは無論、極く零碎なものではあるけれ共、私は其爲に半生の心血を注ぎ盡した、其爲に此病をも得た。而して遂に、私は何事をも眞に知り得ざるものだといふ、漠然たる恐怖唯一つ。

ああ、八歲の年の三月三十日の夕！　其以後、先づ藤野さんが死んだ。路傍の草に倒れた女乞食を見た。父も死んだ。母は行方知れずになつた。高島先生も死んだ。幾人の友も死んだ。軈ては私も死ぬ。人は皆散り〳〵である。離れ〳〵である。所詮は皆一樣に死ぬけれども、死んだとて同じ墓に眠れるでもない。大地の上の處々、僅かに六尺に足らぬ穴に葬られて、それで言語も通はねば、顏を見ぬ。上には青草が生える許り。

男と女が不用意の歡樂に耽つてゐる時、其不用意の間から子が出來る。人は偶然に生れるのだと思ふと、人程痛ましいものはなく、人程悲しいものはない。其偶然が、或る永劫に亘る必然の一連鎖だと考へれば、猶痛ましく、猶悲しい。生れなければならぬものなら、生れても仕方がない。一番早く死ぬ人が、一番幸福な人ではなからうか

去年の夏、久し振りで故郷を省した時、栗の古樹の下の父が墓は、幾年の落葉に埋れてゐた。清光童女と記した藤野さんの小さい墓碑は、字が見えぬ程風雨に侵蝕されて、萱草の中に隠れてゐた。

立派な新築の小學校が、昔草原であつた、村の背後の野川の岸に立つてゐた。

變らぬものは水車の杵の數許り。

十七の歳、お蒼前(さうぜん)様の祭禮(まつり)に馬から落ちて、右の脚を折り左の眼を潰した豊吉は、村役場の小使になつてゐて、私が訪ねて行つた時は、第一期地租附加税の未納督促状を、額の汗を拭き〳〵謄寫版で刷(す)つてゐた。

青空文庫情報

底本：「石川啄木作品集　第二巻」昭和出版社
　　1970(昭和45)年11月20日発行
※底本の疑問点の確認にあたっては、「啄木全集　第三巻　小説」筑摩書房、1967（昭和42）年7月30日初版第1刷発行を参照しました。
※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。（青空文庫）
入力：Nana ohbe
校正：松永正敏
2003年3月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二筋の血

石川啄木

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/